

パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して (XL)

竹 下 春 日

[XV] 14. 隠れた神 (つづき) — 315、317 (22)、319、453、724 (60)、733 (50).

(2) La. 315-Br. 557について。—《だから、何もかもが人間に、その条件を教えてくれているということは、真実である。だが、次の点を正しく理解していなければならない。すなわち、すべてが、神をあらわに示しているということは、真実ではなく、すべてが神を隠しているということも、真実ではない。しかし神は、神をこころみる者にはご自身を隠されるが、神を求める者にはご自身をあらわしたもうということは、どちらも真実である。なぜなら、人間は、神に対してふさわしくない者であるとともに、神にあずかることのできる者でもあるからである。その墮落のゆえにふさわしくない者であるが、最初の本性のゆえに、あずかることができる者である。》(Il est donc vrai que tout instruit l'homme de sa condition, mais il faut bien entendre : car il n'est vrai que tout découvre Dieu, et il n'est pas vrai que tout cache Dieu. Mais il est vrai tout ensemble qu'il se cache à ceux qui le tentent, et qu'il se découvre à ceux qui le cherchent, parce que les hommes sont tout ensemble indignes de Dieu et capables de Dieu : indignes par leur corruption, capables par leur première nature.)

本断章は、一読してその主旨が、神の隠顕と人間本性との関係にかんするものであるから、14の「隠れた神」の分類項目に入れるのが、自然である。

(3) La. 317(22)-Br. 586について。——《もし暗さがなかったら、人間は自分の墮落に気がつかなかつたであろう。もし光がなかったら、人間は救いの希望をいだかなかつたであろう。だから、神がなかば隠され、なかばあらわれていたもうことは、当然そうあっていいことであるばかりか、わたくしたちにとって有益なことである。というのも、自分の惨めさを知らずに神を知ること、神を知らずに自分の惨めさを知らずとも、どちらも人間にとっては同じように危険なことだからである。》(S'il n'y avait point d'obscurité, l'homme ne sentirait point sa corruption ; s'il n'y avait de lumière, l'homme n'espérerait point de remède. Ainsi, il est non seulement juste, mais utile pour nous que Dieu soit caché en partie, et découvert en partie, puisqu'il est également dangereux à l'homme de connaître Dieu sans connaître sa misère, et de connaître sa misère sans connaître Dieu.)

この断章は、人間の《墮落》(corruption)・《惨めさ》(misère)と《救い》(remède)、及びこれらの状態と神の隠頭との関係を叙しているのので、「14隠れた神」の項目に所属する。

またこのfr.は、神との関係における人間実存の内的《暗さ》(obscurifié)と内的《光》(lumière)とについても触れているので、22の「明るさと暗さ」の分類項目にも入ることになる。

(4) La. 319-Br. 559について。——《もし神についてこれまで何一つあらわに示されたものがなかったとしたら、こんなふうに永遠に[・]し[・]る[・]し[・]を欠いた状態は、二つの意味を持つことになったであろう。つまり、人間は神を知るに値しない者であるという意味にも考えられたであろうし、それとともに、およそ神というものの不在を意味するものにもなったであろう。しかし、神がつねにあらわれたまわらないにしても、時々姿を示したもうことによって、こういう意味の複雑さはなくなる。もし神が一度でもあらわれたもうなら、神はつねに存在したもう。そこでこの点から結論しうることは、唯一の神が存在するという、人間はその神を知るに値しない者であるということに

つきる。》(S'il n'avait jamais rien paru de Dieu, cette privation éternelle serait équivoque, et pourrait aussi bien se rapporter à l'absence de toute divinité, qu'à l'indignité où seraient les hommes de la connaître ; mais de ce qu'il parât quelquefois, et non pas toujours, cela ôte l'équivoque. S'il paraît une fois, il est toujours ; et ainsi on n'en peut conclure, sinon qu'il y a un Dieu, et que les hommes en sont indignes.)

本断章は、神の存在の確かさ、及びその隠顕の理由が人間存在の価値に係わっていることとに就いて、言及しているので、14の「隠れた神」に関係していることは、言う迄もない。

(5) La. 453-Br. 559について。 — 《永遠の存在は、ひとたび存在するならば、つねに存在する。》(L'être éternel est toujours s'il est une fois.)

この断章の内容は、上出の断章 (La. 319-Br. 559) 中の《もし神が一度でもあらわれたもうなら、神はつねに存在したもう。》(S'il [Dieu] paraît une fois, il est toujours ;) と、内容上同じことであるので、当然14の分類項目(「隠れた神」)に属する。

(6) La. 724(60)-Br. 518について。 — 《どんなありかたでも、殉教者のありかたでも、聖書によれば、おそろしいものである。／煉獄での一ばん大きい苦痛は、さばきが確定的でないということである。／「隠れておられる神」》(Toute condition et même martyrs ont à craindre, par l'Écriture. / La peine du purgatoire la plus grande est l'incertitude de jugement. / *Deus absconditus.*)

この断章の末尾には、《隠れておられる神》(*Deus absconditus*)という語があるので、14の「隠れた神」の項目に入る。

またこのfr.の前半は、聖書によるキリスト教徒のあり方の厳しさ(人間存在の根本的危機状況)に触れているので、60の「キリスト教徒の性格(Sein)」にも、所属することが可能である。

(7) La. 733(50)-Br. 848について。—《神のご慈愛は、こんなにも大きく、ご自身を隠しておられる時でも、有益な教えをさずけたもうほどなのだから、もしご自身をあらわしたもう日には、およそどんな光でもご自身から期待できないものはないはずである。》(Que si la miséricorde de Dieu est si grande qu’il nous instruit salutairement, même lorsque il se cache, quelle lumière n’en devons-nous pas attendre, lorsqu’il se découvre ?)

この断章は、隠れた神の《慈愛》(la miséricorde) と《光》(lumière) に就いて叙している。それゆえにこのfr.は、「14 隠れた神」および50の「慈愛と裁き」に所属する。

[XVI] 15. この宗教(キリスト教) —41、313、320、418 (30・31)、452 (22)、469 (35・62)、472、716、726 (20).

(1) La. 41-Br. 494について。—《その宗教が真実のものであるならば、偉大さと惨めさをともに教え、自分自身の尊重と軽蔑、愛と憎しみに向かわせるものでなくてはならないであろう。》(Il faudrait que la véritable religion enseignât la grandeur, la misère, portât à l’estime et au mépris de soi, à l’amour et à la haine.)

この断章の冒頭の《その宗教が真実のものである》ということ (la véritable religion) は、内容上キリスト教以外ではあり得ないから、このfr.は15の「この宗教(キリスト教)」の分類項目に入るものと、言いうる。

(2) La. 313-Br. 477・605について。—《……わたしたちの宗教のほかには、どんな宗教も、人間が罪の中に生まれたものであることを教えはしなかった。どんな派の哲学者たちも、そんなことは言わなかった。つまり、どんな派も、真実は言わなかったのである。／キリスト教のほかには、どんな一派も、どんな宗教もこの地上にずっと存続してこなかった。》(……Nulle

religion que la nôtre n'a enseigné que l'homme naît en péché ; nulle secte de philosophes ne l'a dit : nulle n'a donc dit vrai. / Nulle secte ni religion n'a toujours été sur la terre que la religion chrétienne.)

この引用断章は、当断章 (La. 313) の最後の部分であるが、断章全体の主旨を示すものである。つまり、《人間が罪の中に生きたものである》(l'homme naît en péché ;) ことを教える宗教は、キリスト教のみであり、またこの宗教のみが存続して来た唯一の宗教であることが、この部分の叙述で、強調されている。それ故このfr.は、15 の「この宗教 (キリスト教)」に入る。

(3) La. 320-Br. 574について。——《偉大さ——この宗教は、こんなにも偉大なものであるから、これには不明な点が多いからといって、求めるだけの労をとってみない者が、いつまでもそれを持つことができないのは当然のことである。そこで、この宗教が、求めてこそはじめて見出されるようなものだとすれば、一体何をそんなに不平を言うことがろうか。》(Grandeur. — La religion est est une chose si grande, qu'il est juste que ceux qui ne voudraient pas prendre la peine de la chercher, si elle est obscure, en soient privés. De quoi se plaint-on donc, si elle est telle qu'on la puisse trouver en la cherchant ?)

この断章の冒頭には、《偉大さ》(Grandeur) というタイトルが見出されるが、本文の最初の部分に見られる《この宗教》(la religion) とは、パスカルにとっては、言う迄もなくキリスト教を意味するから、本断章は、「15 この宗教 (キリスト教)」の項目に所属する。

(4) La. 418(30・31)-Br. 492について。——《自分の自愛心、自分を神にまでなりあがらせようとするこの本能を、憎まない人は、まったく目がくらんでいるのである。これほどまで、正義と真実に反するものは何一つないことを、さとらない人があるだろうか。……/しかも、それが罪であること、わたしたちが罪の中に生まれたこと、わたしたちはそれに抵抗せずにはいら

れないことを、どの宗教も特に示しはしなかったし、また、その救済策を与えてくれようとしなかった。》(Qui ne hait en soi, son amour-propre, et cet instinct qui le porte à se taire Dieu, est bien aveuglé. Qui ne voit que rien n'est si opposé à la justice et à la vérité ? ……Cependant aucune religion n'a remarqué que ce fût un pêché, ni que nous y fussions nés, ni que nous fussions obligés d'y résister, ni n'a pensé à nous en donner les remèdes.)

この引用文は、全断章中の冒頭の部分と末尾の部分に掲げたものであるが、『キリスト教弁証論』(《Apologie》)を企図したパスカルの主意主旨を示したものである。『パンセ』(《Pensées》)の大部分が、この主旨に添うものであるが、「15 この宗教(キリスト教)」は、《Apologie》の中核の一部を成すものである。而して本断章は、キリスト教が人間の原罪的性格について深刻に自覚反省すべきことを説くのに対して、他宗教がこの思想を欠くことを述べ、かくしてキリスト教の秀れた特性を強調したものである。したがって本断章が、15の「この宗教(キリスト教)」に属することは、言う迄も無い。

またこのfr.は、キリスト教と他宗教の存在を説いているので、「30 キリスト教がただ一つの宗教ではないということについて」の項目に入り得る。

次に、この断章中には、《……どの宗教も……その救済策を与えてくれようとしなかった。》(……aucune religion …… n'a pensé à nous en donner les remède.)という叙述があり、キリスト教における救済策の存在を説いているので、31の「救いの道を約束してくれる宗教」の分類項目にも所属すると、言うことが出来る。

(5) La. 452(22)-Br. 565について。—《だから、この宗教の暗さそのものの中に、この宗教についてわたしたちがほんの少ししか光をもっていないことの中に、この宗教を知ろうとするのにわたしたちがまるで無関心であることの中に、この宗教の真理を見てとるがよい。》(Reconnaissez donc la vérité de la religion dans l'obscurité même de la religion, dans le peu de

lumière que nous en avons, dans l'indifférence que nous avons de la connaître.)

この断章のうちに出てくる《この宗教》(la religion) とは、すべて「キリスト教」を意味しているので、15の分類項目に入る。

ところで、このfr.中にはまた、キリスト教の《暗さ》(l'obscurité) や《ほんの少しの光》(le peu de lumière) という語が出てくるので、22の「明るさと暗さ」の項目にも入ると、言いうる。

(6) La. 469(35・62)-Br. 588について。——《わたしたちの宗教は、賢明でもあり、愚かでもある。賢明であるというのは、何もかもまったく知りつくしているからであり、奇跡とか預言とかの何より堅い土台を持っているからである。愚かであるというのは、そういうことはいずれも、人々を自分の中に引き入れるきっかけにはならないからである。このことは、これに加わっていない人々を罪に定めるには十分であるが、これに加わっている人々を信じさせるに十分ではない。その人たちを信じさせるようにするのは、十字架である。……》(Notre religion est sage et folle. Sage, parce qu'elle est la plus savante, et la plus fondée en miracles, prophéties, etc. Folle, parce que ce n'est point tout cela qui fait qu'on en est ; cela fait bien condamner ceux qui n'en sont pas, mais non pas croire ceux qui en sont. Ce qui les fait croire, c'est la croix, ……)

この引用文は、断章全体の前半に外ならないが、全文の主旨を明示するものである。《わたしたちの宗教》(notre religion) とは、言う迄もなく「キリスト教」のことであり、以下はキリスト教の本質・根拠に関するものであるから、分類項目の「15 この宗教(キリスト教)」のうちに入ることは、言う迄も無い所である。

次にこの宗教は、《奇跡とか預言とかの何よりも堅い土台を持っている》(elle [notre religion] est …… la plus fondée en miracles, prophéties, etc.) という叙述があるので、35の「キリスト教の土台(根拠・証拠)」にも

所属する。また、このfr.の冒頭には、《わたしたちの宗教は、賢明でもあり、愚かでもある。》(Notre religion est sage et folle.)と述べられているが、《賢明》と《愚か》とは矛盾対立を示しているので、この断章は、分類項目中の「62 キリスト教における矛盾」のうちにも入り得る。

(7) La. 472-Br. 285について。—《この宗教には、どんな種類の精神にもぴったりするものがある。まず第一に、その成立ちだけしか目をとめない人たちがある。まさしく、この宗教は、その成立ちだけでも、その真実を証明するのに十分なものを持っている。次に、使徒たちにまでさかのぼって行く人たちがある。もっとも教養の高い人たちは、世界のはじめまでさかのぼって行く。天使たちは、さらによく、さらに遠くから見とおしている。》(La religion est proportionnée à toute sorte d'esprits. Les premiers s'arrêtent au seul établissement, et cette religion est telle que son établissement est suffisant pour en prouver la vérité. Les autres vont jusques aux apôtres. Les plus instruits vont jusqu'au commencement du monde. Les anges la voient encore mieux, et de plus loin.)

この断章の言わんとするところは、キリスト教が、《どんな種類の精神にもぴったりするものがある》([La religion] est proportionnée à toute sorte d'esprits.)ということであるから、「15この宗教(キリスト教)」に所属するものと、言いうる。

(8) La. 716-Br. 68について。—《人間は、「君子」になる道は教えられないが、そのほかのことなら何でも教えられる。だから、そのほかのことなら、何か知っていていてもそれほど誇りに感じないが、「君子」であることは大へん誇りとする。人間は、ただ一つ自分の教えられなかったことを知っているのを、何より誇りに思う。》(On n'apprend point aux hommes être honnêtes hommes, et on leur apprend tout le reste ; et ils ne se piquent jamais tant de savoir rien du reste, comme d'être honnêtes hommes. Ils ne

se piquent de savoir que la seule chose qu'ils n'apprennent point.)

この断章は、後出のLa. 726(20)-Br. 542の伏線と言うべきものである。要するにこのfr.は《「君子」》(honnête homme)なるものが、当時(パスカル時代)の貴族・知識人たちの「理想的人物像」であって、世人から「君子」と見做されることは、彼らの誇りであった事を述べたものである。

(9) La. 726(20)-Br. 542について。—《人間を、同時に「愛すべき・幸福な者」にするのは、ただキリスト教だけである。「君子の道」においては、同時に愛すべき者、幸福な者であることはできない。》(Il n'y a que la religion chrétienne qui rende l'homme aimable et heureux tout ensemble. Dans l'honnêteté, on ne peut être aimable et heureux ensemble.)

本断章は、前出の断章(La. 726)のつづきであり、結論である。「君子の道」(l'honnêteté)は、理想的人間像のあり方として世の人に尊重されているが、真のあるべき好ましい人間像は、キリスト教の説くものであると云うのが、この叙述の本旨である。

以上(8)・(9)の文意に徴して、La. 716-Br. 68, La. 726-Br. 542の二断章は、おのずから15の「この宗教(キリスト教)」の分類項目に入るものである。

[XVII] 16. 心情と理性 — 224, 225.

(1) La. 224-Br. 277について。—《こころには、理性の知らない独自の正しい感覚がある。このことは、多くの事実において認められる。こころが普遍的存在をおのずと愛するようになるのも、自分自身をおのずと愛しているのも、どれだけこころがそこに傾倒しているかにかかっているのだ、とわたしは言いたい。また、こころが、この二つのうちどちらかの方に意固地に反抗するのも、自分の選択によるのである。君は、一方を捨てて、もう一方をそのまま保持している。君が君自身を愛するのは、果たして理性によって

であろうか。》(Le coeur a ses raisons que la raison ne connaît point ; on le sait en mille choses. Je dis que le coeur aime l'être universel naturellement, et soi-même naturellement selon qu'il s'y adonne ; et il se durcit contre l'un ou l'autre à son choix. Vous avez rejeté l'un et conservé l'autre : est-ce par raison que vous vous aimez ?)

本断章は、《こころ》(le coeur) と《理性》(la raison) の相違に触れており、特に《le coeur》の機能の重要性について述べているので、16の「心情と理性」の分類項目に入る。

《le coeur》は「こころ」と訳されているが、「心情」ともしばしば訳されているものである。《le coeur》は、パスカル神学において、最も重要な概念の一つであり、神と係わる認識能力である。

(2) La. 225-Br. 278について。——《神を感じるのは、こころであって、理性ではない。信仰とはそういうものなのだ。理性にではなく、こころに感じられる神。》(C'est le coeur qui sent Dieu et non la raison. Voilà ce que c'est que la foi : Dieu sensible au coeur, non à la raison).

この断章は、前断章 (La. 224-Br. 277) の謂わば結論であって、《神を感じるのは、こころ〔心情〕であって、理性ではない。》(C'est le coeur qui sent Dieu et non la raison.) のである。これが、両断章の主旨であって、前後の二断章はセットを構成しているのであるから、本断章 (後者の断章) も前断章と同様、16の「心情と理性」のうちに所属するものである。

(XL回了)